

ミサゴの生息数が内陸部で増えているのはなぜか？ -生息地としての内陸部のダム湖や河川の適性評価-

所 属 岩手大学大学院
氏 名 榊原 貴之

1. 目的

ミサゴ *Pandion haliaetus* はタカ目ミサゴ科に属する魚食性の猛禽類である。全国の海岸や河川、湖などに広く生息するが、この20年間でダム湖における本種の確認数が顕著に増加している。ダム生態系の上位捕食者である本種のダム利用実態の把握は今後のダム管理において特に重要である。そこで本研究では、内陸部で本種の増加要因を明らかにし、内陸部の河川・ダム湖の生息地としての適性を評価することを目的とする。

2. 方法

内陸部として岩手県滝沢氏の四十四田ダムと盛岡市の北上川、比較対象の沿岸部として岩手県宮古市の宮古湾周辺を調査地とした。内陸部3巣（ダム2巣、河川1巣）、沿岸部2巣にCCDカメラを設置し、餌内容、給餌回数、重量、エネルギー量を記録・推定し比較した。また、岩手県雫石町にある御所ダムにおいて目視にてミサゴの狩場を記録し、記録地点とGIS上でランダムに選択した地点において水深・濁度・底質等の環境測定と刺網を用いた表層魚類の捕獲調査を行い、狩場の環境特性を調査した。

3. 成果

内陸部のダムにおいて349回、河川にて44回、沿岸部において428回の魚種同定可能な搬入記録を得た。内陸部のダムでは、フナ属（22%）、サクラマス（19%）、オオクチバス（18%）の搬入が多く、エネルギー量の面からみても、オオクチバスが重要な餌資源になっていることが示された。河川との比較では、ダムの方が搬入する餌サイズが大きい傾向にあった。沿岸部との比較では、ダムの方が搬入回、搬入1回あたりの重量・エネルギー量が多かった。以上の結果から、ダムは生息する魚類のサイズ・重量が優れることによりミサゴに良好な採食環境を提供している可能性が示された。狩場の特性では、ダム湖においても狩場として水深の浅い場所が重要である一方で、ダム湖上流部における堆砂が良好な狩場環境を提供していることが示された。

4. 今後の展望

外来魚が生態系に及ぼす影響については、外来魚の捕食者としての面に注目した研究がほとんどであった。しかしこの研究により、外来魚が被食者として上位捕食者に影響を及ぼしていることが示唆された。外来魚が上位捕食者に与える影響は、既往研究で十分に評価できていなかった。生態系を包括的に捉えた外来魚管理に向け、具体的な影響の検証を進めていきたい。